

## 良寛短歌の世界

サンフォード・ゴールドSTEIN  
北垣宗治 訳

良寛短歌の世界という主題でお話を始めるに当り、まず良寛の実家である山本家に伝わってきた逸話をご紹介しますと思います。ご存知のように山本家は、現在の新潟県の海沿いの町出雲崎で代々名主を務めた家でした。良寛の弟の由之には馬之助という息子がおり、この人は傾きつつあった山本家のあるじとなる筈でした。馬之助は放埒な快樂追求の生活に溺れていき、誰の忠告をも聞こうとしませんでした。そこで母のヤスコは良寛にむかって、息子の誤った行状を悟らせてやってほしいと頼みました。良寛は弟の家へ出掛けていき、三日間滞在しましたが、その間ずっと沈黙を守り、若者に意見することができないように思われました。良寛が出発する時がやってくると、良寛は母親に、ちょっと息子を呼んでわらじのひもを結ぶのを手伝わせてください、と言いました。ついに良寛が息子に意見してくれるのだと思った母親は、ふすまの陰に隠れ、良寛が別れしなにどんなすばらしい忠告をしてくれるかと、聞き耳を立てていました。息子が良寛のわらじの紐を結ぼうとしていたとき、息子は突然、自分のほっぺたに熱いものを感じました。見上げると、それは良寛の目から流れ落ちた涙だったのです。まるで不思議な悟りの瞬間のように、馬之助は責任感を取り戻したのです。良寛は立ちあがり、黙ってそこを去りました。

このエピソードは短歌的瞬間の神髄を含んでいるように思います。私の知る限り、良寛はこの出来事について短歌を書いていません。しかし私はそれについてどうしても私自身の短歌を作ってみたいと思いました。このようなものです。

若者には  
 どんな諫めの言葉も  
 道徳的な奨めも効果がない。  
 しかし良寛の涙が  
 すべてを告げる。

(かたくなな 放蕩息子の 冷えし心を 解かしたりけり 良寛の涙)

石川啄木は1909年11月30日から12月7日にわたり、東京毎日新聞にシリーズものの長いエッセイを書きましたが、その中で彼は、良寛にも、またたいていの近代短歌詩人にもあてはまると私が信じるものを定義しています。啄木はこう書いています。「詩というものは、ふつう詩と呼ばれているものであってはならない。詩は人間の感情生活の中に起こる変化の正確な報告、正直な日記でなくてはならない。」良寛の短歌は喜びや悲しみ、病気や健康、孤独や調和の中にあって記された、日常生活の記録であると私は信じるものです。私は短歌は日記であると考えていますが、これは私がこれまでに学んできた短歌の作者、与謝野晶子、石川啄木、斎藤茂吉、正岡子規、会津八一に当てはまります。私はこの7月に会津八一の養女、高橋キイ子の58回忌の法要に参列しましたが、その時私は会津八一の美しい短歌連作「山鳩」に繰り返し深い感動を覚えました。「山鳩」は先の大戦で会津が東京空襲から逃れ、いま中条町の一部となっている西條村の観音堂でキイ子を看取った最後の日々の日記といえるのであります。

北嶋藤郷教授と私が訳した『良寛短歌・俳句選』には百首が選ばれていますが、最初の六首は村の子供たちについての短歌です。その日の日記の記入がどのようなものであったかを知るのは、難しいことではありません。

この里に手毬つきつつ子どもらと 遊ぶ春日は暮れずともよし  
霞立つ永き春日を子どもらと 手毬つきつつこの日暮らしつ  
つきてみよ一二三四五六七八九の十 十と納めてまた始まるを  
この宮の森の木下(こした)に子どもらと 遊ぶ春日になりにつらしも  
この宮の森の木下に子どもらと 遊ぶはるひは暮れずともよし  
子どもらよいざ出でいなむ彌彦(いやひこ)の 岡の堇の花にほひ見に

同様にまた良寛が、雪国における長い厳しい冬をすっかり閉じ込められた状態ですごした後、春となって村の子どもらと遊ぶことをいかに喜んだかを理解することも難しいことではありません。家の外での自由と自然の美しさ、特に子ども達と遊ぶことが、どれほど彼を喜ばせたことでしょうか。解良叔問(けら・しゆくもん)は良寛の友人であり、パトロンでもありましたが、その息子の解良栄重(よししげ)は幸運にも良寛と一緒に遊んだ子どもらの中の一人でした。解良栄重が1845年か1846年頃に書いた『良寛禅師奇話』に

は、良寛の日常生活に関して沢山の逸話を伝えています。

解良は『良寛禅師奇話』の中で、どのようにして良寛がいろいろな遊び方を  
する村の子どもらの仲間になっていったかについて書きとめています。こう  
いう遊びの一つでは、子どもらが一文、二文とお金を数えるのに合わせて良  
寛がぐんぐんそり返るといふもので、良寛はさらにさらにふんぞり返ってバ  
ランスを失って倒れる、子どもらは腹をかかえて笑う、というものでした。  
このふんぞり返りの遊びは、良寛が競り市を見たときの話に基づくものでし  
た。競る人が大声で値段を怒鳴ると、良寛はひるんで体を後へ反らせ、さら  
にさらにと反らせていきました。それを見た子どもらが、これを遊びに仕組  
んだというのです。もう一つの遊びは手毬つきで、これは色んな歌に合わせ  
ながら、どれほど長く続けられるかを競うものです。この遊びや、良寛の他  
の面についての情報を、私はアベ・リュウイチとピーター・ハスケル Peter  
Haskel の優れた著作 *Great Fool: Zen Master Ryokan* (『大愚良寛』) に負うてい  
ます。手毬というものは、布を鮮やかな糸で何重にも縛って作り上げたもの  
です。この伝統的な毬はなかなかバウンドしないので、毬のつき手には集中  
力と技術が必要です。子どもは一定のスピードで、ひ、ふ、み、と数えなが  
ら毬をつかなくてはならないのです。良寛の晩年に重要な役割をはたすこと  
になる貞心尼は、或る時良寛のために手毬を作りました。その時貞心は良寛  
にむかってこういう短歌を詠みました。「これぞこの仏の道に遊びつつつく  
や尽きせぬ御法 (みのり) なるらん」

もちろん、日本の子どもすべてが知っている有名な逸話もあります。それ  
は良寛が子ども達とかくれんぼをしていて、干草の山に隠れた話です。子供  
らは良寛を見つけることができません。日が沈み、夕食の時間が近づいたの  
で、彼らは家に帰りました。良寛は辛抱強く待っていました。夜となり、朝  
となりました。農夫の娘がかまどの火を起こすために干草を取りにきたとき、  
良寛が隠れているのを見つけてびっくりしました。良寛は、頼むから大きな  
声をださないでおくれ、子どもらにみつかるから、と言いました。

たしかにこのような面白い話は良寛の生活の一部であります。しかしなが  
ら、かまぼこの宣伝にいつも使われているにこやかな老人としての良寛の顔  
は、私を当惑させます。その良寛は、この世に何の心配もなく、心には何の  
思想もないかのように、ただ蝶とたわむれているからです。

実は、良寛は複雑な人でした。彼は多元的人物、理由なき反逆者、自分に期待される役割を理解する人、子どもにも大人にも自分の時間を喜んで与えることのできる、完全な心理学者でありながら、必要とあれば沈黙を守り通す人でもあったのです。留意しなくてはならないことは、良寛が曹洞宗で禅の訓練を受けた坊さんでありながら、どの宗派に属することなく、部外者であり続けたことです。彼は禅の師匠から悟りの境地に到達したことを証明する「印可の偈」を受けました。禅坊主としての良寛は時間にも、スケジュールにも縛られませんでした。私たち現代人の大部分が不幸にして入り浸っている競争社会にも縛られていません。短歌を作るさいにも彼は規則に縛られることはありません。このことは彼の漢詩についてもいえることです。たしかに日本人には短歌の5-7-5-7-7形式は呼吸のように自然なリズムとなります。しかし外人で短歌を作ろうとする人は懸命に5-7-5とシラブルを数えます。こういう人には石川啄木の逸話が参考になります。すなわちある学校教師が一日に一首の割合で、5-7-5-7-7を完全に守っているけれども、まったく内容のない、人間としての限界を何らわきまえていない歌を書きつけて啄木に送ってきたというのです。その教師はシラブルを数えるだけで短歌ができると考えていることを知って、啄木はいたたまれない気持ちがしました。良寛の場合、彼はいつでも自分が人間であること、物に感じる存在であること、この世の限界を知りつつもなお、大自然のように、この世にはまた驚くべきものが存在していることをも知覚する人でした。

国上山には良寛が別々の時期に住んだ二つの小屋があります。そこで良寛がやったことは何かといえば、それは勇気と謙虚さと、人間につきものの様々な情緒とを持って、孤立した生活に直面することだったと思います。彼は書道を楽しみました。音声学にも興味を持ちました。彼は万葉集の詩人たちを学びました。だとすれば、夜となく昼となく、短歌という形で日記をつける必要はあったのでしょうか？ しかもその日記は、村の子どもらと楽しく遊んでいた時よりもうんと力のこもった瞬間を示すものです。結局それは孤独の生活であり、孤独の生活が創り出したものです。良寛はその人生の大部分を、本当の意味で解放された孤独者として過ごしたのだと私は思います。要するに、彼は家業を継ぐという責任を投げ出した人です。彼は村の禅寺を抜け出し、別の師匠の跡を慕って岡山県の玉島までいきました。禅の師匠が亡くなると、彼はその寺を立ち去り、数年間放浪します。彼の母は彼が家を出て長い時間が過ぎてから出雲崎で死にますし、彼の父は入水自殺を遂げました。ですから、良寛における主たる生き方は、人々と付き合う時はあった

にしても、基本的には孤独の生涯であったように思われます。

次の短歌が彼の孤独世界を明かにします。

世の中にまじらぬとにはあらねども ひとり遊びぞ我は勝れる

この歌の注として、北嶋教授と私は、良寛の描いた自画像に付けられた歌であることを指摘しておきました。つまり詞書に「自画自賛」とあるのです。良寛はアンドンの光の側で読書を楽しんでいます。屋内でも彼は頭巾をかぶっています。禅の坊さんは頭を剃りますので、頭巾が必要なのです。こうして良寛は冬の夜一人で小屋に閉じこもり、本を読み、勉強し、歌や漢詩を作り、書道に打ち込んでいたと想像することができます。

良寛が孤独を楽しんだという場合、それは自然の中での歌詠みをも含むと考えるとよいと思います。彼の短歌の多くは自然を歌ったものです。一つの歌は桜の花をめでたものですし、いま一つはセキレイの鳴き声を歌っています（若菜摘む賤が門田の田の畦に/ちきり鳴くなり春にはなりぬ）。小鳥の動きを喜ぶ歌もあれば、月の光の下で眺めた梅の花の歌もあり、芍薬の歌、虫の声の歌もあります。このような短歌はその中核において日本的であり、良寛を他の日本人から特に引き離すものだとは思いません。実は私はいま新発田の郊外の小さな村に引っ越そうとしているところで、そういう私にとって特に意味のある短歌の一つは、蛙の鳴き声を歌ったものです。

小山田の門田の田居に鳴く蛙 声なつかしきこの夕べかも  
草の庵（いお）に足さしのべてお山田の 蛙の声を聞かくしよしも

しかしながら、他の短歌は国上山の厳しい生活を歌うものです。その一つは雪国の厳しい冬の間、暖を取ることの難しさに触れています。

埋み火に足さしくべて臥せれども 今度（こたび）の寒さ腹に通りぬ  
山かげの草の庵はいと寒し 柴を焚きつつ夜を明かしてむ

加えて、孤独にはマイナスの局面もありました。それは人間との接触を願う思いです。殊に冬の間は、人々と一緒になれる機会はめったに起こらなかったからです。

事しあれば事ありと言ひて君は来ず 事しなきときは音信 (おとずれ)  
 もなし  
 夜もすがら草の庵にわれおれば 杉の葉しぬぎ霰降るなり

多くの短歌が良寛の挫折感、老年の絶望感、人生の疲れを表現しています。

老いが身のあはれを誰に語らまし 杖を忘れて帰る夕暮れ

山道を行くときであれ、どこを歩くにしても、良寛にとって杖は最も必要なものでした。

時として良寛は自分が坊主になったことに疑問を投げかけます。

何ゆへにわが身は家を出でしぞと 心に染めよ墨染めの袖

良寛が、長男としての後継ぎの義務を捨て、弟の由之に名主の地位を譲ったことに、ある程度罪の意識を感じていたことは疑いありません。彼の父親もまた家族を捨て、自殺を遂げたのでした。彼の母がどれほど苦勞したかを思えば、心に痛みを感じなかった筈はありません。良寛が僧になる決心をしたときにも、また坊主となったことの結果として経験しなくてはならなかった困難についても、動揺することが多かったと見なくてはなりません。

それに、もちろん、病気が加わります。

言に出でて言へば易けりくだり腹 まことその身はいや耐へがたし

北嶋教授と私は加藤僖一教授の『良寛の遺墨の精粹』という優れた書物を英訳しました。この本の中に加藤教授は良寛のすぐれた書の一例として手紙の一部を掲載しておられます。読み下し文は「このよらの、いつかあけなむ、このよらの、あけはなれなば、おみなきて、はりをあらはむ、こひまろび、あかしかねけり、ながきこのよを」。大意は「この長い夜が早く明けてほしい。この長い夜が明けたならば、女の人に来て下の世話をし、洗ってくれるだろう。それまで腹の痛みでころげまわるだろう。まことにこの夜長は耐えがたいものだ」(Kato, p. 119)。

日記というものは人生の情緒的な要素を伝えるだけでなく、感覚や思想や人間の条件の分析をも表現するものです。ですからこの世と禅仏教についての良寛の思想を伝える短歌に移る前に、私はちょっと危険な橋を渡り、他の人々から厳しく批判されるかもしれないことを述べてみたいと思います。私としては良寛の漢詩が彼の書いた最良の詩であると信じることで、他の人から批判されたくありません。私がここで申し上げたいことは、彼の漢詩は彼の短歌の展開であるということです。つまり、長い漢詩は短歌の連作のようなものです。例えば20行の漢詩は、4首または5首の連作で作り直すことができます。この点で皆様のご賛同を得られるかどうかわかりませんが、私には漢詩は日記の挿入のように感じられます。北嶋教授と私は良寛の漢詩26篇を英訳し、それを1998年2月発行の『敬和学園大学研究紀要』第7号に発表しました。

これらの漢詩のうちで私の気に入っているのは、次の作品です。

檻樓（らんる）また檻樓

檻樓これ生涯

食はわずかに路辺に乞ひ

家は実に蒿らいに委ぬ

月を看て終夜嘯（うそぶ）き

花に迷うてここに帰らず

一たび保社を出でてより

錯（あやま）ってこの痴凱（ちがい）と為る

（このぼろぼろの衣、破れた着物

このほころびたぼろ着——これがわが生涯である。

食べ物道端でほんのひと口のほどこしを受けるのみ。

棲家にはヨモギや雑草が生い茂り、

秋の月を看てはひと晩中歌を口ずさむ。

春の花にみとれては、道に迷い、家に帰れなくなる。

私を支えてくれた寺を立ち出でて以来

私はこんなに打ちのめされた、大の阿呆となったのである。）

この漢詩も私は一種の短歌連作と考えたいのですが、私はここで良寛が禅僧としての彼の生涯を総括していると思います。彼の衣服は質素なもので、

擦り切れています。釈迦の精神に忠実に、禅僧の義務として、彼は乞食（こつじき）してまわります。手入れすることのない彼の棲家は荒れ果てて雑草が茂っています。けれども彼は秋の月の下で不平をこぼすことはありません。月は禅の人にとって悟りの象徴であります。良寛は秋の夜長を、暗誦できる詩や彼自身の創った詩を朗誦しながら過ごしています。春の時期ですと彼は帰り道を迷ってしまうことがしばしばあります。なぜなら彼は自由であり、春の花を心行くまで眺めて時を忘れてしまうからです。禅の修行者として訓練を受け、そこで悟りの境地に到達した玉島の禅寺を立ち去って以来、これが良寛の生活でありました。これは他の人であれば愚者の生活と考えるかもしれませんが、これこそは良寛が心から受け入れた生活だったのです。

この一連の漢詩のうちで私が好きなもう一つは20番の短い詩で、確かに短歌的瞬間の精髓を含むものです。

首（こうべ）を回せば七十有余年  
人間の是非看破するに飽く  
往来の跡幽かなり深夜の雪  
一炷の線香古匆の下

（私は七十年以上に亘る自分の生涯を省みる。

人間にとって何が正しく、何が間違っているのかを確かめることに私は飽きた。

今夜は雪が高く積もって道がわからないほどだ。

私は一本の線香が燃え尽きるのをじっと眺めている。）

彼は国上山に26年間住みました。しかし老年となって、山の中に留まることが困難になると、国上山の南7マイルの村島崎に移り、友人であり支援者でもある木村元右衛門の家の離れに住みました。良寛は国上山での初期の生活が懐かしくて、新しい棲家で少し落ち込みましたが、禅僧として義と悪とのお決まりの二分法は気に留めませんでした。もちろん線香の匂いはつかの間の静けさを与えましたが、同時に、ちょうど線香が燃え尽きるように、良寛の命がゆっくりと最期に近づいていることを理解しました。

アベとハスケルの良寛研究に出ているもう一つの漢詩もまた日記のにおいがしますが、この場合は思想や知覚に強調点が置かれています。



借問す 三界の内  
 何物か 尤も幽奇なる  
 端座して 諦(たい)を思惟(しゆい)せよ  
 思惟せば 得便宜(とくびんぎ)なり  
 紛々として 随照を羅(つら)ね  
 意を守って 時を失う莫れ  
 久々 若し淳熟せば  
 始めて相い欺かざるを知らん

(私は君に問いたい。この世で  
 最も深遠なもの、最もすばらしいものは何かと。  
 姿勢を正して坐り、最後まで正しく瞑想するのだ。  
 瞑想するにつれて、いとぐちが見つかる。  
 そして、すべてのことが明らかになる。  
 集中せよ。機会を取り逃がすことなかれ。  
 しばらくすれば、君の心は澄み切り、君の知恵は熟していく。  
 そうなると、君はもうじたばたすることはない。)

どうやら良寛はここで禅の公案を与えているようです。精神が真に解放されるのを妨げている論理の垣根を突破するために、良寛は心を集中させようとして問題を発します。つまり彼の公案は「最も深遠なもの、最もすばらしいものとは何か？」です。この公案に答えを見出すために、人は座禅を組まなくてはならない、人は本当に集中しなくてはならないのだ、と良寛は言うのです。公案の論理を打ち破るには時間が必要であり、時には数年もかかることは明かです。しかしこの漢詩では、良寛は途中を省略しています。彼は「しばらくすれば」と言いますが、これはわざと曖昧にしているわけで、実際には何年も何年もかかることがあるからです。いったん論理の壁を突破しますと、すべてが明らかになり、心は洗われて純粹になり、知恵が光を発します。ということは、座禅する人がいったん論理・非論理の二分法を突破しますと、求道者は「最も深遠なもの」とか、「最もすばらしいもの」といった滑稽な問題でじたばたする必要がなくなるからです。人はこの世に出かけて行き、ライフを発見します。ライフはそこにあります。それは瞬間そのもの、事物そのもの、フルに生きられた瞬間であります。

良寛は漢詩を通して、仏教の要素を具体的な毎日の生活と融合させました。私にとって最も感動的な漢詩の一つは、アベとハスケルが英訳した、次の作

品です。

記得す 壯年の時  
 生を資(たす)くるに 太(はなは)だ艱難す  
 唯だ衣食の為の故に  
 貧里 空しく往還す  
 路に有識の人に逢えば  
 我が為に委悉(いしつ)に説く  
 却って見る 衣内の宝の  
 今に 現に前に在るを  
 是より 自ら貿易し  
 到る処 恣(ほしいまま)に周旋す

(私は自分の若いときのことを思い出す。

着るものと食べ物を探し求めていた私には

ただ生きていくことだけでも大変なことであった。

みすばらしい町から町へと、私は絶望的な気持でさまよい歩いた。

そしてついに、私は路上で、知恵の人に出会った。

彼は私に徹底的に説明してくれた。

その時私は、貴重な宝石はずっと、私の衣の中にあったことを悟った。

その宝石はこの通り、ここにある。いまや

この時からこの宝石を使って

どこでも自由自在にふるまっている。)

「貴重な宝石」というのは法華経の中に出てくる寓話の一つです。その物語では、一人の若者が遠い国で生計を立てる決意をします。若者は出発前に一人の友人を訪問します。二人は別れを惜しんで酒宴を張るのですが、若者の方は酔っ払って眠ってしまいます。友人の方は若者の冒険を心配して、若者の衣服の中に一個の宝石を縫い込んでおきました。のちほど若者は旅の途中でさまざまな困難に出会い、すっからかんになり、毎日を食べ物と着るものを求めて過ごしました。とうとう最初の友達が若者に会いにきて、いつも衣服の中に入れて歩いている宝物のことを教えてやりました。こうして若者は救われたのでした。こうして仏陀の弟子たちは、すべての人々をして悟りへ到達せしめる宝物は、常に彼ら自身の内側にあるのだけれども、そのことがわからないでいるのだということを永遠に強調するために、法華経を教え

るのです。良寛の漢詩はこのように、彼の修行時代のことを語っています。彼は玉島の禅寺での厳しい修行を耐えてきました。そこで彼は道元の「永平祿」を読み、お寺での修行生活は時間の無駄使いであることを悟りました。悟りを求める必要はなかったのです。それは、誰の心の中にでも、すでに存在していたからです。恐らく良寛が彼の生まれた土地へ帰ってきたことは、一種の「隠された宝石」を表しているのでしょう。悟りは故郷の町でも発見できたはずですから。

さて、再びここで良寛の短歌のいくつかを味わってみることにしましょう。これらの短歌はこの世の複雑さの知覚に深く沈潜する禅僧良寛を表すものです。この世の複雑さは還元されて物それ自体となり、ライフへの完全な没入の瞬間となり、そこでは、真に自由に、そして単純に生きている私たちを二分法がもはや煩わすことはないのです。

良寛の最も感動的な短歌の一つは、菩薩の慈悲に関係するものです。菩薩は、他の人々が道を見出すのを助けようとして、自分が涅槃に入るのを遅らせるのであります。北嶋教授と私の本で74番となっている短歌をご覧ください。

墨染めのわが衣手のゆたならば まどしき民を覆はましものを

菩薩にとって、衆生が救われるよう助けるために、自分自身の涅槃入りを遅らせることは彼の義務です。この世の貧しい人々に対する良寛の憐れみの気持は非情に深く、彼は自分自身の力の限界を悲しんでいます。この短歌を動かしているのは仏陀の憐れみであり、観音の同情です。次は77番の短歌です。

捨てし身をいかにと問はば久方の 雨降らば降れ風吹かば吹け

仏教の考え方からすれば、人は肉体を否定します——つまり、人はこの世のすべての条件を、自然なものとして受け入れるのです。苦痛、受難、孤独、艱難、こういうものは自然な状況であり、浮世の流転です。この流転を超えていくとは、悟りへの道を歩くこと、そしてそこで本当に戦うことなのです。

100番目の短歌は川端康成が1968年にノーベル賞受賞講演のとき、エドワード・サイデンスティッカーの英訳で引用したものです。

形見とて何か残さむ春は花 夏ほととぎす秋は紅葉ば

良寛が、自分の形見は彼自身の書と短歌であると言えば、これは良寛らしくないでしょう。彼は自然の世界、あるがままの世界と向かい合いました。川端は講演の中で、良寛が古い日本文化の世界と、彼自身の宗教感情を述べていることを感じたのです。

日記はどこまでも続くものです。ですからこのあたりで止めるのがよさそうです。しかし、人間良寛について最後のコメントをしてみたいのは、貞心尼との関係についてであります。平安時代の恋人同士のように、良寛と貞心は歌を交換しました。貞心は長岡の福島にある閻魔堂に住んでいました。貞心は良寛に次の歌を書き送ったことがありました。「こと繁きむぐらの庵(いお)に閉じられて/身をば心にまかせざりけり」これに対して良寛は非情に賢いやり方で答えました。

身を捨てて世を救ふ人もますものを 草の庵に暇求むとは

いかにも良寛です。彼は自己を否定し、自己を批判しながらも、なお仏教の掟に従って人々を救うようにと貞心に奨めています。それは政治的な奨め方です。彼女は家事に熱中してはならないのです。彼女は外に出て、菩薩の働きをしなくてはなりません。しかし、もちろん良寛は彼女が旅をするうちに、彼の庵まで来られることを望んでいます。

善良な仏教者は金銀を崇めるものではありません。しかし良寛は次の短歌で貞心を誉めています。

天が下に満つる玉より黄金より 春の初めの君がおとづれ

そして、最後にはこの短歌です。

いついつと待ちにし人は来たりけり いまは相見て何か思はむ

晩年の良寛は孤独で、病氣勝ちでした。幸いにして彼は貞心に心の友を見つけました。彼は下痢に苦しみ、病氣は結腸のガンにまで進行していました

が、彼はこの若い尼との友情と、手紙の交換に喜びを見出しました。彼らは歌を交換し、相合うことを待ち望み、特別な何かを共有していました。死の床にある良寛を訪ねたのも貞心でした。最後の祈りのとき、良寛を支えたのも貞心だったと思います。当時、そしてそれ以前でも、禅僧は布団の上に横たわって死ぬことをしませんでした。恐らく彼女は、良寛が死ぬとき、座禅の瞑想の姿勢で坐るのを助けたと思われます。

しかし良寛は死んだのではありません。彼はなお私たちの間に生き、私たちに教え、笑いと涙でもって、礼儀正しさと常識でもって、人生の矛盾と彼自身の矛盾でもって、私たちをいまなお感動させます。彼は良寛です。彼は日本人にも外国人にも同様に愛される良寛であり続けるのであります。

本稿は、2002年10月21日、代々木ゼミナール新潟校で開催された、敬和学園大学オープン・カレッジ「地球時代の良寛」第3回講演の原稿である。